

## ある若者との禅問答（？）：パートⅡ

【 「一方を引き立てると他方が引き立たなくなる」という考え（経済学ではこれをトレード・オフというのですが）についてです。

経済学の重要な領域の一つに「交換」がありますが、ものを買ったらお金を失うように、世の中の事象のほとんどについてといてよいほど、”何かを得たら何かを失い”ます。経済学という学問が存在するのもこのトレード・オフがあるからなのです。

つまり、最善を尽くしたとしても、それに至るまでのコスト（時間やお金、精神的なものを含めて）もそれ相応に掛けているわけでありまして、トータルでみたら平衡してしまうのではないかと考えられます。

すると、最善とは一体何なのか？（客観的に）良い生き方とは？と考えてしまいます。

】

【 その人の幸せ観への思索は個人の感性によって異なるだけに、客観的な良い生き方というものはないとも云えます。

ただ今の世の中、互いのコスト（エネルギー）交換の効率的、能率的共通メジャーとして貨幣（お金）があるのでないかと思えます。

ですから、貨幣はそのコスト交換の一つの手段であって、あくまで究極的には、「自分のエネルギーを人のために分け与え、そこからさらにどういったエネルギーをもらえたか」と感じる心の問題と思えます。

だって、お金があることは必要条件の一つかもしれませんが、お金があれば精神的に幸せかどうかは、別問題の側面もありますものね。

「親のない孤児よりも もっと不幸なのは 心の迷い子 精神の孤児なのです（日本の児童福祉の先駆者：石井十次）」という言葉があります。

お金があっても、精神の孤児では、淋しいですね。

また、「〈こころ〉というものは、もともと相手を思い遣る想像力を通してしか、見えてこないものだ。」（大宅壮一ノンフィクション賞：受賞作家。吉田司）という言葉があります。

つまり、人との係わり合いでこそ自分の心が見えてくるのであり、「如何に人のために自分のエネルギーを使うかにある」とも言い換えられるのでないでしょうか。

あまりにも今の世の中、貨幣価値優先であるために、自分の心、人の心を感じる感性が鈍っているとも云えます。

「人類の犯した大罪の一つは、感性の衰退だ。」（動物行動学者：コンラッド・ローレンツ）の言葉は、今の物質主義、貨幣万能主義への警鐘かなと思えます。 】【